ふくしま県人会だより

第43号
令和3年1月
福島県人会
北海道連合会

福島県人会北海道連合会長 新年あいさつ

福島県人会北海道連合会
会長　田中　四郎

令和三年の新年を迎えましておめでとうございます。各県人会の役員、会員の皆様には、輝かしい新年を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。日頃は、連合会行事に御支援と御協力を賜り厚く御礼を申し上げます。連合会事業として、令和二年五月二十四日、函館市湯の川温泉で総会開催の準備を函館福島県人会さんが進めておりましたが、新型コロナ禍の為中止となりました。残念ではありましたが書面を以って終了となりました。それ以降もコロナの感染は拡大を続け、顔を合わせての会議は一切出来ない状態が続いております。一日でも早くコロナが治まる事を願うばかりになってしまいました。

この様な中でも、役員間では意思の疎通をはかるため、令和二年十一月九日（月）事務局の皆様に万全なコロナ対策をとっていただきまして、役員会を開催致しました。様々な懸案事項を決定させていただきました。その中でも、特に会員の皆様には役員の改選のお知らせがあります。私は、連合会長就任以来二期四年が経過いたしました。この際、後進に道を譲り任期満了をもって会長を退任いたします。これまで何かと御支援御協力を賜りましたことに深く感謝を申し上げます。尚、後任会長は、美幌町福島県人会長の近藤康弘氏にお願いする事になりました。よろしくお願い申し上げます。

北海道は、明治政府による廃藩置県によって、全国各地から北海道開拓の名のもと多くの人々が入植してまいりました。そこに村が出来て、村が広がり町となりそして、町に愛着が生れ、住民間に親睦が深まり、コミュニティが広がり、ふるさとを思う集いから県人会が誕生し今日に至っています。それから長い時間と歴史を経て、各地の県人会は、会員の減少や高齢化により活動低下の現象がみられます。考えてみると、決して数が多いから良いとか、若いから良いだけではありません。少ない会員でも他人に思いやり、町を愛して会を愛して志しを同じくして、物事を皆でしようという気があれば少ない人達でも熱い情熱で実行出来ると思います。

福島県に古里を持つ人は、人情厚く、血も熱く、この大地に根を深くはって、一日一日を過ごして来ました。先人達の精神を重んじて、次の人達の為に頑張っていこうではありませんか。私は、これからも頑張っていこうと思っております。

福島県知事 新年あいさつ

「新たな復興・創生のステージへ」

福島県知事　内堀　雅雄

謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

福島県人会北海道連合会におか

れましては、昭和四十八年の発足以来、ふるさとを同じくする方々の心のよりどころとして、会員相互の交流を深められておりますことに心から敬意を表します。また、会員の皆さんにおかれましては、ふるさとを想う熱意を胸に本県に格別のお力添えを賜りまして、厚く御礼申し上げます。

さて、震災から間もなく十年の節目を迎えようとしております。この間、県民の皆様の懸命な御努力と国内外からの温かい御支援により、福島県は着実に復興への歩みを進めてまいりました。

昨年は、双葉町、大熊町、富岡町の帰還困難区域の一部地域で避難指示が解除されたほか、ＪＲ常磐線の全線再開、福島ロボットテストフィールドの全面開所など、明るい話題も多くありました。

そのような中、新型コロナウイルス感染症が世界各国で急速に拡大し、私たちの生活は一変しました。

県といたしましては、引き続き、喫緊の課題である新型感染症対策はもとより、震災と原発事故からの復興・再生、令和元年東日本台風等災害からの復旧、地方創生・人口減少対策などに全力で取り組んでまいります。

まず、新型感染症対策については、ウィズコロナにおける感染拡大の防止と社会・経済の再生を両輪で進めていくとともに、感染者への差別や誹謗中傷の防止に力を尽くしてまいります。

次に、避難地域の復興・再生については、今年四月から第二期復興・創生期間がスタートします。引き続き、被災者の生活再建や生業の再生、廃炉・汚染水対策などの課題にしっかりと取り組んでまいります。

また、令和元年東日本台風等災害からの早期復旧に努めるとともに、災害を教訓に、命を守るための避難行動の促進を図るなど、災害に強い県づくりを進めてまいります。

さらに、人口減少対策については、子育て支援策等の充実や雇用の場の確保などに取り組むとともに、本県が持つ移住先としての魅力を積極的に発信するなど、「福島ならでは」の地方創生を推進してまいります。

今年七月の東京オリンピック・パラリンピック大会においては、これまで国内外から頂いた多くの御支援に対する感謝の思いと、復興が進んでいる福島の姿と魅力を広く発信するとともに、感染防止対策を徹底し、選手の皆さんを始め、福島を訪れる多くの皆さんにとって安全・安心な大会となるよう準備を進めてまいります。

ウィズコロナの状況においても、常に危機感とスピード感を持ち、最大限の効果を発揮するためには何が必要なのかを常に意識しながら、この難局を乗り越え、福島の新しい未来を形作るための挑戦を続けてまいります。今後とも、一層の御支援、御協力をお願い申し上げ、新年の御挨拶といたします。

会員通信

改めての自己紹介

札幌福島県人会

会員　大山　洵

会員通信の執筆を担当させていただく事となったのですが，今年は新型コロナの関係で行事等が無かったこともあり、何を書こうか悩みました。まだ皆さまに私の事を十分覚えていただいていないであろうとも思われ、改めて自己紹介をさせてください。

私の出身地は福島市で、岳陽中学校、県立福島高校を卒業し、北大の受験で生まれて初めて北海道の地に足を踏み入れて以降、札幌に住んで十五年目となります。福島にいた頃はまさか自分が北海道に住むなんて全く考えてもいなかったのですが、札幌がすっかり気に入り、今や人生の半分近くを札幌で過ごしたことになります。

仕事は弁護士をしています。個人の方の離婚、相続、交通事故等から、企業様の顧問、Ｍ＆Ａ等の事業承継など、様々な案件を取り扱っています。初回のご相談は無料で承っていますので、何かお困りの事があれば遠慮なくご相談いただければと思います。

そんな私ですが、福島に住んでいた頃は、父の仕事の都合で福島県内を転々としていました。福島→喜多方→会津→いわき→福島といった感じです。ただ、私の父も母も新潟県の出身で、私も血液的には「新潟の血」になります（さらに言うと、生まれたのも新潟の病院です。）。もっとも、その後幼い頃から育ったのが福島で、「ふるさと」はどこか、と人に尋ねられたら迷いなく「ふくしま！」と答える自分がおり、人に何を言われようが福島が出身地だと思っています。札幌に来てからも、甲子園といえば聖光、高校サッカーといえば尚志、ということで北海道の学校よりも断然応援してしまっています。（笑）

福島には少なくとも年に一回、年末年始には帰省しています。決して都会とは言えない福島ですが、毎年少しずつ街の状況に変化があったり（中合が無くなったのはとても残念ですが。）、福島に帰ることで活力が貰える気がします。

この一年は新型コロナの影響で様々な変化があった年でした。特に、「人と会う」ということの意味を考えさせられる年だったかと思います。人それぞれの考えがあろうかと思いますが、実際に「会う」ことはやはり大切だと実感しているところです。新型コロナの見通しがついて、早く皆さまとお会いできることを楽しみにしています。

【第４７回連合会総会にて】

何才になっても　母に逢いたい，私，

旭川福島県人会
会計監査　一條　俊子

新型コロナウイルスに感染し、亡くなられた方々に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

全道福島県人会の皆様、未知の新型コロナウイルスの蔓延で自粛生活を余儀なくされていることと思います。

私がこの新型コロナウイルスの事を知ったのは、令和二年二月二日でした。それからは感染に注意、自粛の毎日でウイルスと対峙して来た毎日を書かせていただきたいと思います。

思い起こせば私の「生みの親」が昭和十五年八月ごろに当時はやりの「腸チフス菌」にかかり、すぐ隔離され，村八分，状態になったそうです。

毎日苦しく、熱にうなされ私の名を呼び続け「乳を飲め、乳を飲め」と言いながら頑張って治療に専念いたしましたが、残念ながらその甲斐もなく昭和十五年十一月十七日に二十三才で亡くなりました。私はまだ生後八ヶ月でした。母には隔離されてから一度も会えず、一度も抱かれず、母乳も飲むこともできず、一生の別れとなりました。母はどれだけ悔しかっただろうと思います。どうにもならない菌とたたかい続けたかと思うと、私の心が痛みます。

私には「生みの親」がいてその「母が死亡」したことを知ったのは、小学校四年生でした。その日から「カーちゃん」に逢いたいとの日々を送り、夢を見たい、夢の中で顔を見たい、会いに来てと心で願ったこともありました。今でも、心と記憶から消えることはありません。

育てのお母さんは八十八才で亡くなりましたが、今でも心から感謝しております。有難うございました。私は二人の母親に守られ、幸せを頂いて今日も頑張っております。

「腸チフス菌」と「新型コロナウイルス」は違いますが、未知の「コロナウイルス」には恐怖心を感じます。終息は何時なのか分からないし、自粛、自粛で老いて行くのは余りにも寂しく、気持ちとしては、せめても母のためにも四倍くらいは生きたいものと思っています。

，三密，を避け「マスク」「手洗い」等をしっかり守り、周りの方

たちを思い、自ら気を付けて毎日を過ごしてゆきたいと思っています。

人類は「宇宙の一雫」と云われています。考える動物に生まれ、宇宙のリズムで動き、何が起ころうとも自ら考えて生きてゆく力を与えられ、苦労人でも人には大切な心があります。

「笑う」「怒る」「泣く」、何をするにも「心」が動きます。

良き心を持ってコロナウイルスに負けずお過ごしください。

一日も早くウイルスが終息しますことを心よりお祈り致しております。

私も、皆様方と元気な姿でお会い出来る日を楽しみにしております。

コロナ禍で　マスク姿が　夢に出て　付けない人を　追いかける

出ておいで　未知のウイルス　何処にいる　自粛と伴に　老いて行く

としこ

俳句を二点考えてみました。

旭川福島県人会
事務局長　圓谷　清

古関さん　朝ドラエール
感謝です

ＮＨＫ朝ドラ「エール」から、古関裕而さんのことで多くの事を教えていただきました。そして多くの人がそれぞれに感動とエールを受けたと思います。いつまでも人の心とスポーツの場面に残る名曲をありがとうございました。

はやぶさ2　福島企業の
落下傘

はやぶさ2帰還の大成功において、着陸直前の落下傘が必要でしたが、その落下傘の製造企業が福島県の企業との報道がありました。必成功の陰に、「福島県の力あり」を知ることができました。感動です。

十年前の震災を思い出して

美幌町福島県人会
幹事　吉田　武薫

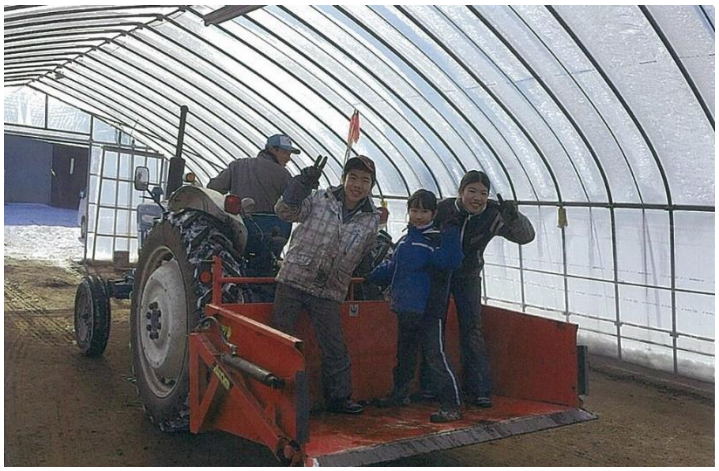
間もなく東日本大震災から十年が経ちます。当時私は外食産業で働いており埼玉を担当しておりました。当日は休みで自宅におり、たまたま部下から連絡が来てベランダで電話をしておりましたが、突然大きな揺れを感じ、周りを見ると、走行していた新幹線が駅でもないところで停車し、向かいの木造の住宅は倒れるのではないかと思うくらい大きく揺れておりました。すぐに着替えて担当している中で最も近い店舗へ急行し、各店舗の情報収集にとりかかりました。どの店舗でも食器は多く破損したものの、けが人等はおりませんでした。そんな中、スマートフォンでテレビを見ると、東北の沿岸で黒いマグマのような津波が町を飲み込んでいく映像が流れ、大きな恐怖を感じました。ほどなくして携帯電話も通じづらくなり、表へでると国道十六号線は大渋滞となり、今までに経験したことのない、異常な事態を実感しました。

夜になり携帯がつながり始めたころには、度重なる余震により、各店で水道管に亀裂が入ったり、水道が濁り、営業できなくなる店舗ができたり、物流が滞り、食材がまともに配送されなくなったため、各店舗へ食材を運んだりしました。ガソリンを入れるにもスタンドが営業しておらず、営業している店舗では大行列。計画停電で常にどこかは停電している状態など、バタバタの日々が続きました。

時間が経つにつれて、従業員の家族の安否も確認され始め、従業員の家族が犠牲になったとの情報も入り始めました。

幸い私の身内での犠牲はなかったものの、普段仕事をしている仲間がつらい思いをしている状況を見

るのは非常につらいものでした。
被害を受けた地域の方々は必死に復興へ向けて頑張り続けてきたこの十年であったと思います。自然災害は人間でコントロールできないものですが、人間がコントロールできる対策は、あの震災から学んでいかなければならないと強く思います。



「コロナに負けないで・・・」

別海町福島県人会
事務局長　大内　照雄

令和二年度は、どんな年ですか。
一月末に何処からともなく、忍び寄る新型コロナウイルス感染拡大。連合会会長、北海道事務所長を招いての第五十三回定期総会開催予定が中止、書面会議になり終了。考えも付かない感染拡大は、北海道知事の緊急事態宣言により過去に事例のない自粛体制。三密をさける為、全ての交流会、行事もできず、家庭での自粛生活、何とか会員との絆を得るために苦慮している。
厳寒期の北海道ではコロナ感染は自粛活動で終るかと思い、暖かい季節がきたら解除されるだろうと、安心していましたが雪の降る十一月に入りまた益々猛威を振るい始めた北海道。県人会組織も、わずかばかりの会員ではする事もなく、ただ今、困惑しているところです。
九月に入り突然事務所より、当県人会へ訪れて戴きました三名の方に感謝を致します。次長菅野英二氏、主査東海林広尚氏、主事加藤鉄平氏の三氏の訪問、初対面でありながら非常に懐かしく感じられました。もし時間が充分にあるならば、会員全員に周知して集合したかった。しかし、この時期と時間帯では三密を避け三氏の方と会わせるには、近くの会員が精一杯でした。
母県（福島県）の方から必ず聞かれる言葉、どうして先祖がこの地で住むようになったのか、昭和の初期時代の、聞くも語るも、北海道開拓百五十年の苦労話と、二代目三代目の世代です。先代が福島に住んでいた町村の現在の様子を聞きながら、先代はよくこの地で力強く辛抱したものと感心しました。
こんな些細な小さな言葉がお互いの心に分かちあい、絆が生まれるものです。
一年は本当に早いもので何も出来ないと思いながらこの期間を、会員と何か繋ぐ方法はないか、お便り発行を、試してみることにした。只今第四号新年号を作成中です。何時まで続くか？
連合会各県人会の皆様、コロナに負けないで、我々県人会も第五十四回に向け、東の空を大きく広げ明るい希望の年を待っています。

【訪問時の記念写真】

札幌福島県人会　磯部定成さん出版本のご紹介

令和二年九月二十四日（木）に、札幌福島県人会の磯部定成さんが事務所に来所され、自費出版された本を提供いただきました。
「福島第一原子力発電所　立地場所変遷の歴史を綴る！」「野口英

世博士物語」の二章構成となっており、前章では磯部さんの故郷である大熊町をはじめとする相双地域における、原子力発電所の建設前から震災後までの、貴重な記憶が綴られています。

今回は、特に昨今の新型コロナウイルス感染拡大の状況もあり、続く「野口英世博士物語」の章から一部抜粋してご紹介させていただきたいと思います。

北海道からはじまり、青森から沖縄まで感染者が何名プラスした等、近頃はゲーム感覚でニュースを見ている。そこでひょっと思い出したことがある。千円札にも印刷されている「野口英世博士」のことである。野口博士は日本が生んだ世界の医学者で、人類のために未知の病気とたたかい続け、黄熱病の研究途中五十一歳で亡くなった。野口博士が現在活躍していたら「コロナウイルス」を退治してくれるだろうと思った。

（中略）

その後二十八歳の時、渡米してニューヨーク「ロックフェラー医学研究所」へ移る。ここで、野口博士は新たな細菌との闘いに挑戦した。

（中略）

○スピロヘータ・バリーダを検出・発見

○東大に「梅毒」の論文を提出（大正３年）

○トラホームの検査始まる（１９０５年～）

○蛇毒の研究始まる（１９０１年～）

○小児マヒの研究始まる（１９１２年～）

○狂犬病の研究始まる（１９１２年～）

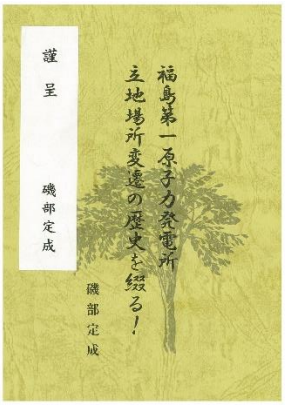
○ワイル氏病の研究始まる（１９１５年～）

○中南米へ行き黄熱病の研究（１９１８年～）

（研究途中黄熱病に感染し５１歳で死亡）

以上が抜粋となります。

故郷の先人について、改めてその業績を見ていくと、その偉大さを感じられるかと思います。



新会員の紹介

札幌福島県人会

鈴木　洋平　様（出身　須賀川市）

「福島はＨＡＰＰＹ　ＩＳＬＡＮＤ」、と教えてくれたのは小野町出身の母親でした。父は郡山出身、私は生粋の福島っ子です。

野球に打ち込んでいた少年が、十八歳で福島を離れ、早二十二年が経ちました。が、未だに訛りは取れません。「福島ご出身ですよね？」とほぼほぼ聞かれます。

北海道という土地で、福島に縁のある皆様とお会いし、お話しできる日を楽しみにしております。

今後ともよろしくお願い致します。

福島県からのお知らせ

札幌市内で県産農産物のＰＲ活動を行いました。

令和二年九月十日（木）に、札幌市内の福島県と繋がりの深い企業等を訪問し、県産農産物のＰＲを行いました。

創業者が福島県出身であり、東日本大震災後、毎年義援金を寄付いただいている、佐藤水産株式会社様と、会津出身者の学生寮「会津学寮」を前身にもち、福島県出身の大学生などが入寮している、一般財団法人福島学寮様を訪問しました。それぞれに、県産ももから作られたジュース「桃の恵み」の贈呈を行い、福島県の農産物を味わっていただくとともに、福島県に対する引き続きのご支援・ご協力をお願いしました。

【福島学寮訪問の様子】

【佐藤水産訪問の様子】

各県人会への訪問活動を行いました。

今年度は新型コロナウイルスの発生により連合会総会や各種行事が開催できず、会員等の参集ができないことから、北海道事務所が各県人会を訪問し、会の現状等について意見交換を行いました。

まず、令和二年九月十五日（火）に、浜中町福島県人会の川村副会長及び別海町福島県人会の大内事務局長と会員の皆様を訪問させていただき、県人会のこれまでのお話や、過去の入植のお話などを聞かせていただきました。

翌日の十六日（水）には根室市にて浜中町福島県人会の菅原事務局長とお会いして、根室市にある会津藩士「梶原平馬」のお墓をご案内いただきました。

また同日午後には野付半島にある会津藩士のお墓をお参りした後、美幌町を訪問し、美幌町福島県人会の近藤会長、大竹事務局長とお会いし、道東地域の現状や会の取組について、お話をお伺いしました。

【根室市「梶原平馬」のお墓】

【野付半島にある会津藩士のお墓】

【美幌町にて】

また、十月十三日（火）には、苫小牧市内にて苫小牧福島県人会の大槻事務局長、吉成幹事長とお会いし、港まつり中止に伴う桃の予約販売など、コロナ禍での柔軟な会の活動についてお伺いしました。

そして同月の十五日（木）には、函館市の魚来亭（会員：久保利江さんのお店）にて、函館福島県人会の小山会長、菅野事務局長とお会いし、昼食を食べながら、福島の話に花を咲かせました。

新型コロナウイルスの影響で各県人会の皆様にお会いする機会もない中、貴重な訪問活動となりました。ありがとうございました。

【苫小牧市にて】

【函館市「魚来亭」の前で】

あんぽ柿のＰＲを行っています。

今年もあんぽ柿の季節になりました。例年であれば、一月に札幌市内でＰＲイベントを開催していたところですが、今年度は新型コロナウイルスの影響により、イベントを中止し、広報活動を行うこととなりました。

まずはあんぽ柿のＣＭを作成し、十二月から一月の間にＨＴＢ及びＳＴＶで放送を行いました。また、製造工程についてのリーフレットも作成し、各市場に配布しました。今後はラジオやテレビなどでのＰＲも予定しています。

また、一月二十六日（火）から二月一日（月）の間は、札幌大通ビッセ内の四店舗（炭焼・寿し処 炙屋、鮨 棗、肉の割烹 田村、オムライスのお店 ＯＭＳ）で飲食された方、それぞれ各日先着三十名にあんぽ柿のサービスがありますので、お近くの方、いらっしゃる機会のある方はぜひお立ち寄りください。

併せて、お近くのスーパーなどで、福島県産のあんぽ柿を見かけた際には、ぜひ手に取っていただき、ふくしまの自然の美味しさを味わってください。

【ふくしま生まれのあんぽ柿】

福島県の新しいお米「福、笑い」ができました。

福島県が十四年という歳月をかけて開発した新しいお米「福、笑い」ができました。九月にはパッケージデザインが公開され、十一月十日（火）から一月十一日（月）まで福島県内及び首都圏で先行販売が実施されました。

「福、笑い」は、米どころふくしまのトップブランドとして開発されたお米であり、限定された生産者のもと、厳しい基準を満たしたものだけが名乗ることを許されます。

「香りが立ち、強い甘みを持ちながら、ふんわり柔らかく炊き上がる」という個性的な食感・食味が持ち味です。

「福、笑い」の本格的なデビューは令和三年の秋を予定しています。皆様、楽しみにお待ちください。

東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンしました。

令和二年九月二十日（日）、福島県双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」が開館しました。

館内は、震災時の状況が時系列で展示され、映像資料や解説により、複合災害の発生で日常がどのように変わっていってしまったのかを知ることができます。また、福島県の復興に向けた取組についても情報を発信しています。

併せて、展示だけではなく、震災遺構へのフィールドワークや語り部の講話を通し、エネルギー問題や防災など、私たちがこれから考えなくてはならない課題について、より深く学ぶことができます。

十月十二日（月）には来館者が一万人を突破し、修学旅行等での利用も増えています。

なお、編集担当（加藤）も先日見学してまいりました。